

外海の漁場開拓・避難 水路に加え観光振興

ふなびき 船引運河



島根県隠岐郡西ノ島は北東から南西にのびる島で、南の浦郷湾沿いに開けていました。その浦郷湾の奥まった集落が船越です。ここは内海と外海の距離が短く、陸地部も標高が低い船を引き上げて出漁していたことから船越、あるいは船引ともいわれています。地名として根付いていたことから、古くからこのやり方で出漁をしていたことがうかがえます。

大正2年（1913）、船越集落がある黒木村議会に「船引地峡開削工事」の計画が提案されました。この開削によって、迂回が不要になること、緊急避難も容易になること、漁獲物も市場に直ちに運べること、農産物の運搬にも便利であることから、可決されました。また、西側の浦郷村は道路建設中で財政的には難しい時期ではありましたが、漁業振興には不可欠の事業として村議会で承認を得ることができました。

両村は組合を設立し、大正3年6月22日、事業は開始されました。工事に当たっては、大型土木機械のない時代のため、松江から多くの石工が集められました。破碎以外の工事は全て人力で、毎日50～60人によって鍬とツルハシで掘り起こされ、土砂はトロッコで内海側に運ばれました。工事開始から9カ月後の大正4年3月、全長340m、底幅5.5m、水深1.65mの運河が完成しました。

大正12年までの10年間、組合は運河の管理を続け、この間の費用は18500円といわれています。黒木村の年間予算が13000円であることからしても、運河開削は村民の大きな願いであったことがうかがえます。

昭和38年（1963）、隠岐は島根半島、三瓶山とともに大山隠岐国立公園に編入されました。船引運河から外海へ出て西へ向かうと、隠岐の誇る景勝地国賀海岸へつながっています。観光船のルート確保のため水面幅12mに広げられた船引運河。かつて、漁場へのアクセスを確保するために掘られた運河は、観光船が行きかう航路として隠岐の観光産業に大きな役目を果たすとともに、津波や高潮など、緊急時の減災にも貢献することでしょう。

■位置図



昭和35年頃の船引運河
（「運河のある町」西ノ島町発行より転載）



外海へつながる船引運河



大山隠岐国立公園「国賀海岸 通天橋」
標高257mの摩天崖、通天橋といわれるアーチ状の大きな岩の架け橋。玄武岩の断崖や海蝕洞が続く隠岐の誇るべき景勝地の一つである。



摩天崖の草原で寝そべる隠岐牛